



# TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy



## TOYO UNIV.

Newsletter No.18 2014. 4

### シンポジウム「いのちの尊さを考える」

環境デザインユニット：河本 英夫

シンポジウム「いのちの尊さを考える」が、1月11日（土）に125周年記念ホールにおいて開催された。このイベントは、学術研究推進センターとの協力のもと、TIEPhが企画実行したものである。生命論関連の実験系の研究者を中心に、一つの講演と、4名のパネリストからなる研究発表を組み合わせたものである。

講演の冒頭は、村上和雄先生によるDNA解析にかかわる日本のバイオ・サイエンスの展開についての話題であった。話もとてもうまく、聴講者がリラックスして聞くことのできるものであった。ある家庭の青年が、親しさの感じられる女性を見初め、父親にあの女性と結婚したいと相談すると、父親はそれはやめておくと回答する。どうしてかとさらに聞くと、父親は「お母さんには言うてはいけませんが、あの女性は別の女に生ませた自分の子供だ」という。しょうがないので、母親に同じ女性について「お父さんはそとに作った女性とは結婚できないと言っている」と相談すると、母親は「結婚すればよいのよ、お父さんには内緒だけど、お前は実はお父さんのこどもじゃないんだよ」これがDNA解析の前振り話である。講演の本題は、村上和雄先生の自伝的な話である。DNAの解析で多くのことが明らかになると思われていた時期の貴重な証言と記録でもある。現在では、DNAとタンパク系の機能とは一対一対応はせず、またDNAと形態のようなマクロ指標はほとんど対応しないことが明らかになっており、より詳細な研究局面に入っていることが述べられた。

この後、シンポジウムまでの合間に、自民党衆議員議員小池百合子氏の訪問、挨拶もあった。数分間の滞在であったが、さすがの存在感である。

シンポジウムは、第一に生命科学部の金子(大谷)律子先生の性転換の現象についての自分自身の実験例をもとにした話であった。性転換するさいには、起動する遺伝子に違いが出るらしくそれを突き止めた実験であった。ベラのような魚類は、比較的容易に性転換する。集団の中央のオスを人為的に取り除くと、周囲にいた最も身体の大いメスが性転換を起こすが、そのとき卵巣を精巣に組み替えていく。第二に理工学部の寺田信幸先生による生体バランス制御の話があった。自律神経系とホルモンが関与する制御システムである。血管壁がはがれやすくなり、分解されない血管板が心臓につまると心筋梗塞、その塊が脳に入ると脳梗塞となる。第三にライフデザイン学部の精神科医でもある白石弘己先生による、臨床での生活支援の話が、症例

を中心にして行われた。引きこもりの症例が多かったが、本人による必死の自己治癒の試みの成果が病態であるので、臨床的な支援も容易ではない。第四に文学部の河本が、複雑系科学からの生命論を行った。カオス理論からの臨床例と伸長-圧縮変換だけで、どの程度の変化がでるかというような話があった。



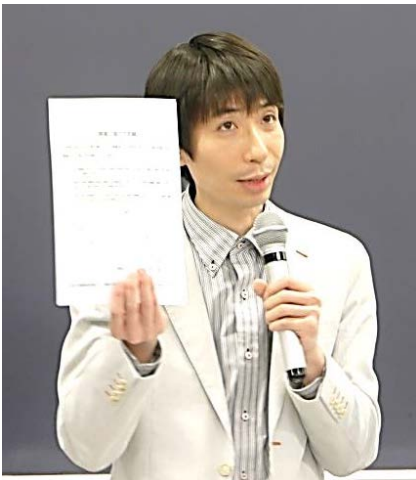
シンポジウムの後、フロアーを含めて総合討論が行われ、活発な議論がなされた。

(2014年1月11日開催)

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ (TIEPh) は、自然観探究ユニット、価値観・行動ユニット、環境デザインユニットから構成され、さまざまな研究活動、シンポジウム、研究会を企画・運営しています。

# 環境配慮行動の実行可能性認知について（調査報告）

価値観・行動ユニット研究支援者：大久保 暢俊



TIEPh 第二ユニットでは、心理学を専門とする研究者が中心となり、調査や実験といった方法を用いて環境にかかわるテーマに取り組んでいます。今回報告するのは、その中のプロジェクトのひとつである、環境配慮行動の実行可能性認知の調査結果です。

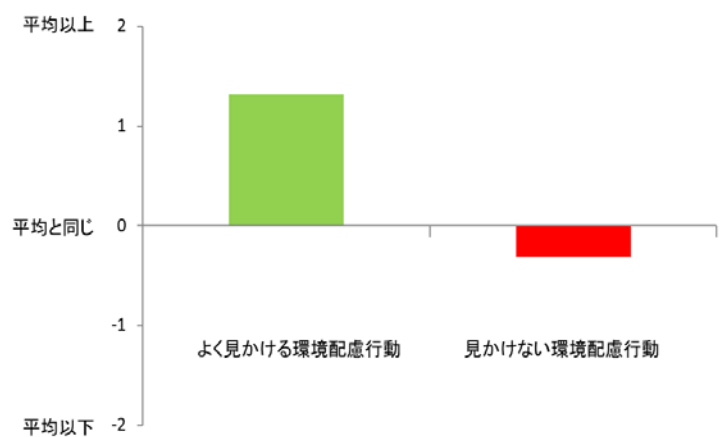
これまで、環境に対する価値観の国際比較をはじめ、TIEPh 第二ユニットでは精力的に実証研究が行われています（大島, 2007, 2008, 2009, 2012: エコ・フィロソフィ研究）。「実行可能性認知」プロジェクトでは、環境配慮行動を促進する「行動の実行しやすさ」の要因に着目しています。行動の実行しやすさ（実行可能性）の認知は、環境を大事にしたいと思う態度を、それと一貫する行動に結びつける重要な心理要因です。今回は、自己評価（自分がどれほど当該の行動を実行できると思うか）という他者を想定しない評価と、平均他者評価（平均的に人はどれほど実行できると思うか）、相対自己評価（平均的な人と比べて自分がどれほど実行できる

と思うか）という他者を想定した評価を同時に測定することで、実行可能性の認知に、私たちの「平均的な他者像（≒世間の感覚）」がどの程度の強さで影響しているのかを検討しました。

心理学的な調査は、なんらかの心理要因を含むモデルを想定します。そこで、この評価間の影響関係を検討するための心理メカニズムとして、私たちは「平均以上効果」という心理現象の認知メカニズムを適用しました。平均以上効果とは、自分は少なくとも平均よりも上であると考えた心理傾向のことです。この現象の面白いところは、そのような個人が集まった社会（マクロ）レベルの状態を説明できることにあります。もし、私たちが平均以上効果のような心理を持っていなければ、個々人の評定値の平均は理論的な中央値に近くなるはずですが（誤差を考慮したうえで）。しかし、もし、多くの人が「自分は少なくとも平均よりは上（マシだ）」と考えており、そのような人が大多数を占めているのであれば、平均値は理論的な中央値よりも大きくなります。実行可能性の認知がこの心理的性質を備えているのであれば、環境に配慮した行動を行おうとする際、ある種の心理的バイアス（歪み）がかかることとなります。このバイアスは時に厄介な存在となることがあります。たとえば、このバイアスゆえに社会全体として「価値観は共有していても実行ができない」という状態になってしまうなどです。本調査は、このバイアスにかかわる一連の心理・行動プロセスを検証することで、バイアスの所在を正確に突き止めることを大きな目的としています。

調査は、東洋大学で開講されている「エコ・フィロソフィ入門」の受講生を対象に行いました。206名の学部生さんに、環境に配慮した10種類の行動について、どれほど実行できそうかを答えていただきました。10種類の行動は大きく2つに分類でき、ひとつは他者が行っているのをよく見かける環境配慮行動（たとえば「部屋から出るときはエアコンや暖房を消す」など）と、他者が行っているのを見かけない環境配慮行動（たとえば、「誰かがエコロジカルでない行動をしていたら指摘する」など）がありました（堀毛, 2012: エコ・フィロソフィ研究）。他者が行っているのを見かける行動は、多くの人にとっての行動であり、本来は自分だけでなく他者も「実行できる」と推測できる行動です。それに対して、他者が行っているのを見かけない行動は、実行それ自体が難しく、自分だけでなく他者も行うのが難しい行動です。もし、私たちが合理的であれば、どちらの行動であれ平均以上効果は確認されず、理論的な中央値と同じになるはずですが。

データ分析の結果、他者が行っているのをよく見かける環境配慮行動では、自分は平均よりもできると考えている人が多いということが明らかになりました。すなわち、平均以上効果が確認されました。さらに、その心理メカニズムとして、平均情報を無視して自己情報に注目する心理過程も明らかになりました。それに対して、他者が行っているのを見かけない環境配慮行動では、平均以上効果とは逆の平均以下効果（多くの人



「縦軸は評定値の平均値（範囲は-3から+3）。どちらも平均と同じ（=0）との差は統計的に有意であった（ $p < .05$ ）」



心理傾向)が確認されました。そして、この心理過程には、自分が実行する際の困難度の認知が大きくかわっていることが明らかとなりました。

今回は主要な結果を報告しましたが、より詳しい分析や追加の情報は TIEPh ホームページ、および研究年報にて報告されています。興味、ご関心のある方は是非ともご覧ください。

## 国際セミナー「自然といのちの尊さについて考える」

研究助手：岩崎 大

東洋大学 TIEPh は、2006 年度より茨城大学地球変動適応科学研究機関 (ICAS) との共同研究を続けており、今年度も国際セミナーを共同開催した。昨年度に開催されたセミナーで、サステナビリティ学にとって「自然といのち」の関係を考えることの必要性が確認されたことをうけて、今年度は引き続き同テーマを、より学際的な視点で掘り下げることを目的としている。基調講演では菅沼憲治先生(聖徳大学)が「アルバート・エリス博士から学ぶー寛容について考えるー」と題し、臨床心理士として自身が用いている REBT(Rational Emotive Behavior Therapy)理論を基にした治療の事例を紹介し、人間の根源的関心を引き出し、それに応じていくための方法を提示した。



研究報告は 5 名の若手研究者で構成され、関陽子先生(東洋大学国際哲学研究センター)「獣害対策における「いのち」の課題ーニホンザルと人との関係からー」、秋山知宏先生(東京大学)「自然といのちを尊ぶ開発について」、増田敬祐先生(東京農工大学)「人間の共同に関する環境倫理的問いーいのちの回復と自然の取り戻しー」、上柿崇英先生(大阪府立大学)「環境哲学から見る「自然」と「いのち」ー持続可能性と人間存在の倫理ー」、岩崎大(TIEPh)「自然観と死生観をつなぐー終末期患者の視線からー」という、幅広い視点からの研究成果が報告された。

これらの報告を踏まえた全体討論では、司会の中川光弘先生(茨城大学)、コメンテーターの岡野守也先生(サングラハ教育・心理研究所)およびジェフリー・クラーク先生(本郷高校)から、全ての報告に通ずる問題提起を、「ポストモダンのコスモロジー」としてとらえ、それについてのコメントがあった。活発な議論の末に、共同体を含めた他者関係に基づく自然といのちの尊さの自覚、という環境形成の必要性が確認され、今後の継続的な研究連携による実践が期待される、意義深い会となった。

(2014 年 2 月 22 日開催)

## 「第五回 人間再生研究会」

研究助手：岩崎 大

TIEPh 環境デザインユニットは、障害者再生のための環境構築を目的とする人間再生研究会を毎年開催している。2013 年 12 月 15 日に自治医科大学で開催された本研究会では、聴衆を含め、脳神経系のリハビリテーションに関わる様々な分野の専門家が集った。今年度のテーマは「認知神経リハビリテーションは何になりうるのか?ーシステムと経験の再生」であり、TIEPh が進めている神経現象学リハビリテーション研究についての報告も行った。

講演は、精神科医の加藤敏先生(自治医科大学)が「作業療法の吟味ー回顧と展望」、神経内科医の加藤宏之先生(国際医療福祉大学病院)「脳卒中後の脳運動ネットワークの再構築と脳機能画像診断」と題して講演を行った。さらにシンポジストとして河本英夫先生(TIEPh)、池田由美先生(首都大学東京健康福祉学部)、大越友博先生(芳賀赤十字病院)、稲垣諭先生(TIEPh)がそれぞれの最新の研究、事例を紹介した。能力の再生、治療行為の目的、治療プロセスにおける経験の拡張等といった事象を、哲学的な環境デザインの視点から捉えなおすことの必要性、そして、そこに見出されるリハビリテーションの展開可能性を、個々の臨床家が実践するための方法について、会場を含んでの活発な議論が取り交わされた。



(2013 年 12 月 15 日開催)

## 研究年報「エコ・フィロソフィ」研究第8号

昨年度末に「エコ・フィロソフィ」研究第8号を発行いたしました。以下の論文はTIEPhホームページでもご覧いただけます。

- 「柳田國男の農業文化環境論1」(河本英夫)
- 「語り手」という動物—小説の言語行為をめぐる試論—(山本亮介)
- 「南方熊楠と曖昧な「エコロジー」:序説」(田村義也)
- 「今、神道を見直す—Something Greatへの感嘆と崇敬の念—」(唐澤太輔)
- 「散楽から舞楽へ—芸能伝承の視点から—」(王媛)
- 「社会的ジレンマにおける「監視ボランティア」の可能性と有効性」(大島尚)
- 「環境配慮行動の実行可能性認知と困難度の関係」(大久保暢俊・東垣絵里香)
- 「ウエスト・コースティング」(河本英夫)
- 「エコ・スペクトラム1——「環境金融論」」(河本英夫)
- 「死生観と自然観をつなぐ環境デザイナー—ホスピスにおける風景の意義—」(岩崎大)
- 「プロセスとしての臨床(1) ナラティブという経験は何を示唆するのか」(稲垣諭)
- 「プロセスとしての臨床(2) 臨床・内・存在の現象学」(稲垣諭)
- 「セルフ・セットアップ 記憶への旅立ちの日々に」(河本英夫)

## 2013年度の活動報告

- |  |  |
|--|--|
| <p><b>5月</b><br/>和歌山県 南方熊楠顕彰館視察</p> <p><b>7月</b><br/>ニューズレターNo.16 発行<br/>研究活動報告会(自然観探求ユニット)<br/>場所: 東洋大学白山キャンパス</p> <p><b>8月</b><br/>アメリカ合衆国カリフォルニア州 地熱発電所<br/>および自然環境視察(環境デザインユニット)</p> <p><b>9月</b><br/>東洋大学の「全学総合授業」として<br/>「エコ・フィロソフィ入門」を開講<br/>2013年度 全学総合IB『エコ・フィロソフィ入門』</p> <p><b>10月</b><br/>TIEPh主催 シンポジウム(自然観探究ユニット)<br/>「南方熊楠:神と人と自然」<br/>場所: 東洋大学井上円了ホール</p> <p><b>11月</b><br/>ニューズレターNo.17 発行</p> | <p><b>12月</b><br/>TIEPh主催 研究会(環境デザインユニット)<br/>「第五回人間再生研究会」<br/>場所: 自治医科大学地域医療情報研究センター</p> <p><b>1月</b><br/>TIEPh共催 シンポジウム(環境デザインユニット)<br/>「いのちの尊さを考える」<br/>場所: 東洋大学 125周年記念ホール</p> <p><b>2月</b><br/>TIEPh共催 国際セミナー(自然観探究ユニット)<br/>「自然といのちの尊さについて考える」<br/>場所: 東洋大学白山キャンパス</p> <p><b>3月</b><br/>「エコ・フィロソフィ」研究第8号、第8号別冊発行<br/>TIEPh共催 研究会(環境デザインユニット)<br/>「方法論研究会」<br/>場所: 東洋大学6号館 第三会議室<br/>TIEPh主催 特別セミナー(価値観・行動ユニット)<br/>「コンサベーション心理学の可能性<br/>—自然を思いやる心を育てるには—」<br/>場所: 東洋大学白山キャンパス5号館 5310教室<br/>活動報告会(評価委員会)</p> |
|--|--|

3月開催のイベントについては次号のニューズレターにて報告いたします。その他、2014年度もさまざまなセミナーやシンポジウムを企画しています。詳しくは、TIEPhのホームページでご確認ください。

ニューズレター18号 平成26年4月発行  
編集 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ(TIEPh)  
住所: 東京都文京区白山5丁目28-20 6号館4F 60458室 Tel&Fax: 03-3945-7534  
E-mail: ml.tieph-office@toyo.jp Website: <http://www.toyo.ac.jp/site/tieph/>